

# 2024

# 国語

## 〔帰国生入試〕

### 注 意

1. 試験時間は、8：50～9：40の**50分**です。
2. 問題は ・ の2つです。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

〔一〕 次のカタカナの文章に句読点をほどこし、漢字ひらがな交じりの文章に書きかえなさい(漢字で書けるものはすべて漢字で書きなさい)。

カレハユツクリトアルキダシタナツノマヒルダツチイサナマチノイエナミハスグニツキテムカシノママノフミキリヲコ  
エルトセンロニソイリヨウガワニヤヤキフクノアルハタチガヒロガルカレハメヲホソメナガラアルイタトオクニカスカニ  
ウミノオトガシテイタ

〔二〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

モハメド・オマル・アブディンさんは「目の見えないスーダン人」として十九才の時に来日し、盲学校(現在の特別支援学校)で日本語を学習しました。その後、日本語学習の一環として日本語能力試験に挑戦しました。次の文章は、アブディンさんがインタビューで当時の思い出を振り返ったものです。

——二級合格までは、漢字はあまりやっていなかったんですね。漢字の勉強が本格的に始まるのは、このあとでしょうか。

そうですね。二級合格が分かってからまもなく、一月中だったと思いますが、(注1)高瀬先生が「漢字の勉強をしよう」と言い出しました。このころ、まだぼくたちは、点字受験でも漢字の問題は出ると思ってたんです。点字受験が始まったのは一九九五年ですから、ぼくが受験したのは早いころでした。高瀬先生も点字の試験は見たことがなくて。

実際には①点字受験の場合、漢字の問題は出ないんです。出ると言われて二級を受けて、なかったんですけど、あったっけかなあとと思って。二級を受けてきたあとで、高瀬先生に「漢字の問題どうだった」と聞かれたけど、「あったかもしれないけど、全然分らないようなのはなかった」とか、「そんなに苦しい問題はなかった」とか、言っていましたね。二級の受験が終わった時、もう崩れ落ちそうなくらい疲れて、

細かいことは覚えていらなかったんですよ。だから、頭の中では、**X**、そういう問題があったのに気づかなかったのかもしれない、点字の問題を一枚飛ばしてしまったかもしれないと、余計な心配もしていました。

試験の練習では、普通の問題を点訳してもらって使いましたから、漢字の問題も入っていたんです。**Y**、「大臣はなんとかをシサツしました」とあって、その「シサツ」の「サツ」にどの漢字を書くか、選択肢の中から選ぶというような問題でした。見る「察」のほかに、殺すの「殺」とか、印刷の「刷」とかが書いてあって、この中から選びます。練習しながら、こういう問題は嫌だなあと感じていましたが、実際には出なかったんです。その問題は別の問題に振り替えられてたみたいです。

このあとの漢字の形を覚える授業は、**②試験に出るといふ勘違い**があつたから必死になれたんですけど、勘違いだつてことを知らなくてよかつたんじゃないかと思ひます。出ないと分かつてたら、あそこまで必死にやれなかつたかもしれない。

ぼくは基本的に、見えない人には漢字の形の勉強は必要ないと思ひています。たくさんの同音の漢字から適当なものを選ぶ力、違う読み方でも同じ漢字なんだということを推測する力は必要で、一つひとつの漢字の意味を知るのは必要だと分かつてますけど。それは、当時も同じでした。

ところが、高瀬先生は、形を勉強したほうがいいと言ひんです。コミュニケーションの潤滑油にもなると。「初対面の時、まず自己紹介するでしょう。相手の名前を聞いた時、「どんな漢字を書くんですか」と質問すると、相手との距離が近づく」というわけです。それから、たとえば「コ」の字になつてください」とか、「大の字になつて」とかさ、そういうのが会話でも出てきますね。「十字にする」とかね。そういう時にも、形を知つてるといいということなんです。「だから、偏と旁という考え方とか、よく使われるニンベンとかシンニョウとか、基本的なことが分かればいいですよ」と言ひました。日本語能力試験一級の対策以外に、こういう漢字の知識の活用方を教えてもらえてよかつたです。これはほんとに役に立ちました。それまでは、漢字は自分の勉強のためと思ひていたんですけど、高瀬先生は、それとは**③まったく違ふ角度**から取り上げてくれたことになりました。

漢字の形を書いて覚えながら、音読み・訓読みも一緒に学んでいきました。ぼくはその前に、点字図書館から借りた録音図書を聴いて文学作品も楽しんだりしていたので、言葉はいろいろ知つていたんです。音読み・訓読みを学ぶ中で、それまで結びついていなかったいくつかの言葉が、同じ漢字で結ばれているのが分かつてきます。漢字によって言葉のネットワークができていきます。それはすごいものだったと、今思い返しても思ひます。**④重い扉が開いた**ような気がします。

——高瀬先生は、漢字の形をどうやって教えてくれたんですか。

油粘土あぶらねんどと、子ども用のカタカナの本を（Ⅰ）う、と先生が用意してくれました。カタカナの本は、文字の部分がへこんだ溝みぞになっていて、指で触れるようになっていてるものです。先生はぼくに、ひらがなはいらないけど、カタカナは漢字の一部になるからといって、カタカナと漢字を関連づけて教えてくれました。カタカナの本は宿題として貸してくれて、うちで何度も（Ⅱ）て覚えました。

油粘土は、お菓子かしの缶かんに麵棒めんぼうと割り箸わしと一緒に入れてあって、「はい、漢字の時間」と言うのと、その缶を取り出します。その蓋ふたのほうに油粘土を伸ばして、麵棒で平らにして、先が丸いお箸を使って、彫るほように書いていくという方法で、先生が書いてくれたのをぼくが触さわって覚えたり、ぼくが覚えてきたのをそこに書いたりしました。油粘土は滑りすべがいいから、それほど力を入れなくても書くことができました。書いたらまた麵棒で平らにする。こうやって同じ粘土を何度も何度も使いました。

カタカナを覚えていくと、漢字の部分がカタカナと同じというのがたくさんあるから、便利に使えました。たとえば「イ」はニンベンになるし、「ウ」はウかんむり、「エ」を書いた時、上に突き出すと、「これはだめ。カタカナの「エ」は突き出さない。突き出したら「土」になる」と言っていて、「土」も教えてくれるわけです。

よかったのは、たとえば「大」という字を書いたあとに、その音読みと訓読みを使った例文をいくつか（Ⅲ）てくれたことです。そうすると、「大」は「ダイ」とも「オオ」とも読むのが分かる。（注） ongoing process といつか、漢字の形と意味を、同時に覚えていくわけです。

「大」の字は大好きです。習ってすぐに、好きになりました。⑤くつろいでいます。当時は第二・第四土曜日が休みで、第一・第三は昼まで授業があつて、そのあとが高瀬先生の授業だったので、ぼくは **Z** 疲れていました。「大」を触って覚えた時、「くつろいでるなあ。こんなにくつろいでいいのかなあ」と思いましたね。ぼくも、学校から寮りょうに帰ると、あの形で寝ねていましたから、「ああ、ぼくだ。じっくりくるなあ」と思いました。

日本語能力試験のためとかいうことを忘れるくらい、高瀬先生との漢字の勉強は楽しかったです。たとえば、死亡の「亡」、亡なくなるという字を勉強して、これに心を意味するリッシンベンを付けると「忙ぼう」。心が亡いそがくなると書いて「忙しい」、「多忙」の「忙」ですね。先生は次に、「亡」の下に「目」を書くと、「盲人」の「盲」だと言いました。目が亡いそがいのが「盲」だ。ぼくはこれを聞いて「目はありますよ、ないのは視力です」と言いました。先生は「ほんとね、この字を作った中国人に文句を言わないとね」と言って笑ってくれるんです。先生が笑ってくれるから、ぼくもどんどんいろいろなことを言います。そして、こんなふうにしやべってる録音テープを貸してもらって、何度も聞きなお

して、授業で習った漢字を復習しますから、記憶きおくにしっかりと残り残ります。先生とぼくが漢字をめぐるって、漫才まんざいの掛け合いかみたいな楽しい会話をしています。楽しく漢字の形を覚えることができました。こうして、たくさん話すうちに、日本語の会話力も伸びたと思います。

漢字の形を知ったら、授業にも便利でした。見える人がどう認識しているかが少し分かってきました。前はどうして「なんとか偏」なんていう言い方で漢字の説明をするのか分からなかったんですが、訓読みできない漢字もあることが分かりました。珍しい漢字もあります。そういう場合は、形で説明するしかないんですね。サンズイになんとかの字、何とかという字にシンニョウの付いたの、とか言うほかないんだということも分かりました。形を学ぶ中で理解が深まったわけです。

部首のナベブタを勉強した時、先生は、**◎台所からほんとに鍋の蓋なべをもつてきて触らせてくれました**。「これを横から見たらどうなる？ その形が部首の「ナベブタ」です」って。ナベブタはほんとに鍋の蓋みたいな形ですね。圧力鍋の蓋みたいに、大きな蓋の上にチョコンとつまみが付いています。

それでも、粘土で形を覚えたのは漢字の全部じゃなくて、必要な部分だけです。特に部首は、形を作って触って覚えました。ニンベン、サンズイ、シンニョウ、門構えとか。部首についてはそうやって形を覚えましたが、あとの多くは形ではなく、自分でイメージを作って覚えました。漢字の形を勉強して、それまで知らなかった領域を知ったことは、自信につながりました。

(モハメド・オマル・アブダイン『日本語とにらめっこ——見えないぼくの学習奮闘記』による)

(注1) 高瀬先生：「ぼく」に日本語を教えてくださいました先生。

(注2) *ongoing process*…「進行中の過程」という意味。ここでは漢字の形と意味を同時並行で学んでいる様子を指す。

問一 空欄X、Yに入る言葉としてもつとも適当なものを次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

- |   |        |   |      |   |      |
|---|--------|---|------|---|------|
| ア | たとえば   | イ | けっして | ウ | しばらく |
| エ | もしかしたら | オ | まるで  | カ | たいてい |

問二 空欄Ⅰ～Ⅲに入る言葉を次の中からそれぞれ選んで、直す必要があれば**適当な形に直して**、解答欄に答えなさい。

挙げる            使う            なぞる

問三 傍線部①「点字受験の場合、漢字の問題は出ない」とありますが、「出ない」にはどのような理由が考えられますか。その説明となつている以下の文の解答欄に合うように、**適当な言葉**を考えてそれぞれ答えなさい。

普段点字を使うのは（ア）人であり、ひらがなやカタカナと比べて形が（イ）漢字を学ぶことは困難だから。

問四 傍線部②「試験に出るといふ勘違い」とありますが、「ぼく」が勘違いしてしまったのはなぜですか。その理由としてもっとも**適当な**ものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 「ぼく」は目が見えないために、二級の試験を受ける途中で問題冊子のページを飛ばしてしまったから。
- イ 二級の試験を受けた時にあまりにも疲れてしまって、漢字の問題があつたのか忘れてしまったから。
- ウ 高瀬先生とは漢字の勉強もしていたので、つきり漢字の問題が出題されると思ひこんでいたから。
- エ 二級の問題が簡単すぎたために、試験にどんな問題が出ていたのか気にかけてすらいなかったから。
- オ 「ぼく」は外国人であるため、漢字とはどのような言葉なのかを知らないまま試験を受けていたから。

問五 傍線部③「まったく違う角度」とありますが、高瀬先生は漢字の学習にはどのような利点があると考えていますか。それを示す言葉を本文中から十三字で抜き出して答えなさい。

問六 傍線部④「重い扉が開いた」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちを四十字以内で説明しなさい。

問七 傍線部⑤「くつろいでいます」とありますが、「ぼく」はなぜそのように感じたのですか。四十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑥「台所からほんとに鍋の蓋をもってきて触らせてくれました」とありますが、先生は何のためにこのようなことをしたのですか。自分の言葉で説明しなさい。

問九 本文の内容の説明として適当なものにはA、不適当なものにはBを、それぞれ解答欄に答えなさい。

- ア 「ぼく」は日本語の学習をする中で漢字に興味を持ち、高瀬先生に漢字の学習がしたいと提案した。
- イ 目の見えない人に漢字の学習は必要ないと考えている「ぼく」に対し、高瀬先生は必要だと考えていた。
- ウ 高瀬先生は目の見えない「ぼく」でも楽しく漢字が覚えられるように、油粘土による学習法を用いた。
- エ 高瀬先生は、目が見えないことを「盲」という漢字で表現した中国の人に対して怒りを覚えていた。
- オ 「ぼく」と高瀬先生の漢字の学習は、漢字だけでなく日本語を話す力を伸ばすことにもつながった。

問十 本文では、「ぼく」が日本語を学んでコミュニケーションをとれるようになる様子がかかれています。あなた自身が、自分とは違う言語を使用する人とコミュニケーションを取るうえで苦労したことや、コミュニケーションをとるためにした工夫を、これまでの経験にもとづいて説明してください。まず、いつ、どのような状況で相手と関わりをもったのかを書き、それからどのようなコミュニケーションをとったのか、そしてどのようなことを考えたのかを説明してください。

【模範解答】

一 (20点)

彼はゆつくりと歩きだした。夏の真昼だった。小さな町の家並みはすぐに尽きて、昔のままの踏切りを越えると、線路に沿い、両側にやや起伏のある畑地がひろがる。彼は目を細めながら歩いた。遠くに、かすかに海の音がしていた。(105字)

……減点法(間違い1か所ごとに1点減点)

不自然ではない範囲で、読点の位置ずれは許容。

彼・尽・踏・越・伏は、小学校で学習しない漢字のため、誤字・ひらがな許容。



二(50点+30点)

問一 X・エ Y・ア Z・カ ……2点×3

問二 I・使お II・なぞつ III・挙げ ……2点×3

問三 ア・目の見えない イ・複雑な・難しい ……2点×2

問四 イ(4点)

問五 コミュニケーションの潤滑油(3点)

問六 いくつかの言葉が同じ漢字の読みになっていることを新しく知り、感心している。(三十七字)(6点)

問七 「大」の形が、「ぼく」が家で寝ているときの身体の形に似ていたから。(三十三字)(6点)

問八 実際に鍋の蓋を触り、部首のなべぶたの形を知ること。(5点)

問九 ア・B イ・A ウ・A エ・B オ・A ……2点×5

問十 ……30点

a 具体的な出来事(いつ、どのような状況) 6点

b コミュニケーションの工夫・苦勞 9点(特に良い9点 良い8点 普通5点 悪い2点)

c そこから考えたこと 9点

d 全体の構成 3点(良い3点 普通2点 悪い1点)

e 文体・表現・言葉遣い 3点

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□

問十										問九	問八	問七			問六		問五	問四	問三	問二	問一
										ア									ア	I	X
										イ									II	Y	
										ウ									III	Z	
										エ									イ		
										オ											

Vertical lines for writing answers.

国語 解答用紙

注意  
 一字制限の問題では、句読点も一字として数えます。

受験番号	フリガナ	
	氏名	

得点	
----	--